

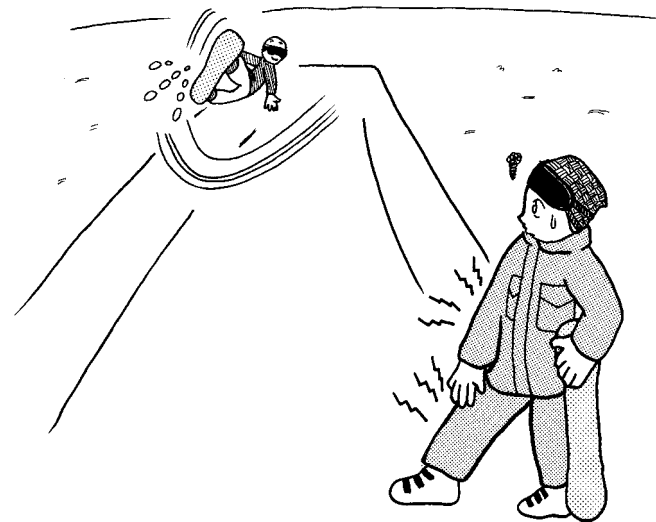
## 遷延性疼痛の高次運動機能への影響

研究代表者 大阪大学 住谷 昌彦

スポーツなどによる外傷（骨折、捻挫）後にレントゲン検査やMRIなど医学的検査では異常ないにも関わらず、疼痛のため運動の再開や日常生活動作（ADL）の回復が遅れることがあります。

本研究では、上肢の遷延性疼痛患者を対象に視覚刺激と鼻を往復するポインティング課題を明暗2条件で行わせ、その運動軌跡の不正確さと反応時間を評価しました。

その結果、反応時間は患肢と健肢で有意差はありませんでした。しかし、患肢では、運動の不正確さに関して、視覚情報と体性感覚情報を統合して上肢運動が行われる明条件より、体性感覚のみで上肢運動が行われる暗条件で運動を正確に行うことができる事実が判明しました。つまり、患肢の視覚情報がポインティング動作の障害となっていることが示唆され、外傷後に長期間続く疼痛は、中枢神経系の高次運動機能（眼・手協調運動）を障害していることが判明しました。



外傷後に長期間続く疼痛は、中枢神経系の高次運動機能（眼・手協調運動）を障害している

